マレーシアの教育事情

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校　教諭
群馬県伊勢崎市立宮郷小学校　教諭　須　田　貞　崇

キーワード：マレーシア、教育制度、公立小学校、ＡＡＪ (Ambang Asuhan Jepun)、授業・学習環境

１．はじめに

マレーシアは東南アジアのほぼ中心に位置し、マレー半島南部の西マレーシアとボルネオ島の北部沿岸地域の西マレーシアの２つの地域からなる。国土面積は２つの地域を合わせると約33万平方キロメートルであり、日本の総面積の９割弱である。マレーシアは、人口約3000万人であり日本の総人口の16％でほどであるが、マレー系・中国系・インド系、そして多数の部族に分けられる先住民族で構成される多民族国家である。国教はイスラム教であるが信仰の自由を認めており、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教などを信仰する国民も多くいる。公用語はマレーシア語（マレー語）であるが、多民族国家のため中国系住民社会では中国語、インド系住民社会ではタミール語が使用されている。また、各民族間で会話をする際は広く英語が使用されており、英語が主体となっている。マレーシアは、13の州と３つの連邦特別区によって成立しており、首都はクアラルンプールで人口は180万人以上である。筆者はクアラルンプール日本人学校に小学校教諭として３年間赴任した。その際、現地の初等教育と大学予備教育課程の現地調査を行う機会を得た。マレーシアは多民族国家であり、それと同様に多種多様な学校が存在する。小稿では日本と異なり、様々な学校・教育システムが混在するマレーシアの現在の教育現場を紹介したい。

２．マレーシアの教育制度の特徴について

(1) マレーシアの教育制度

マレーシアの教育制度は日本とは大きく異なる。大まかには就学前教育（幼稚園）ののち、初等教育（小学校）６年、前期中等教育（中学校）３年、後期中等教育（高校）２年、上等中等教育（大学予備教育課程）２年、高等教育（大学など）３年のいわゆる「６－３－２－２－３制」となっている（図１）。義務教育に関する法令上の規定はないが、公立校であれば中等教育まで無償なため、初等・中等教育の就学率はほぼ100％となっている。

小学校段階では国語であるマレー語が必修である（国民学校）が、中国語、タミル語、英語も併せて行う学校（国民型学校）もある。他にも後述するブミプトラ政策の一環として将来を担うマレー系エリートを養成する全寮制中等学校も40校ほど存在する。ブミプトラ政策が適用されない中国系、インド系などは独立系の私立学校から海外の大学へ留学することになる。

その他にも、オーストラリアやヨーロッパのイ

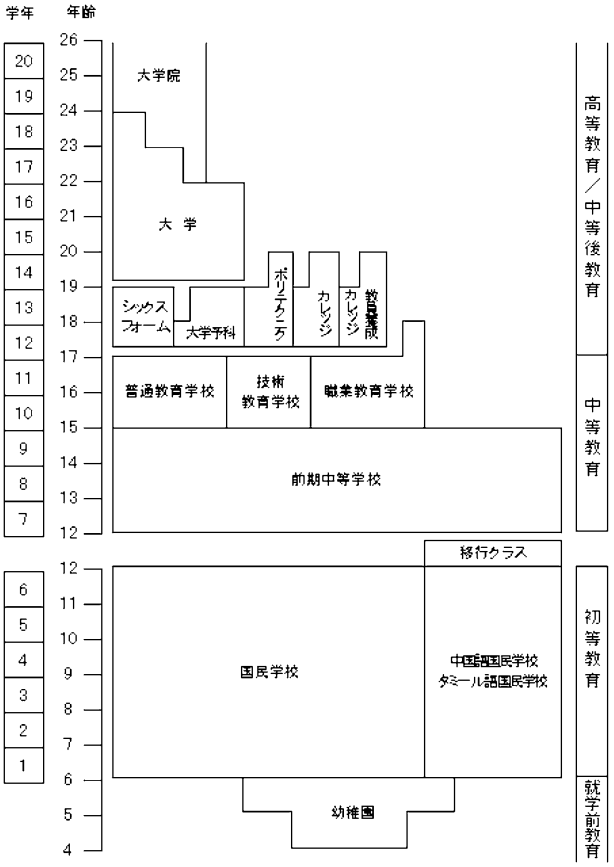

図１　マレーシアの学校系統図
出所：文部省大臣官房調査統計企画課、諸外国の学校教育（アジア・オセアニア・アフリカ編）鐘ヶ江2002より

ンターナショナル校の分校がマレーシア国内に設置されており、いわゆる「母子留学」をするために来馬する日本人も近年多く見られるようになった。そのような教育事情の中で、クアラルンプール日本人学校も日本の在外教育施設として重要な役割を占めている。

(2) ブミプトラ政策について

「ブミプトラ」とは、マレー語で「土地の子」という意味で先住民族であるマレー系を指しており、移民してきた中国系、インド系民族などと区別するために使用されている。ブミプトラ政策は、経済的に低いマレー人の地位改善を目標とした政策であるが、教育行政にも色濃く反映されている。様々な特権や教育機会への特別な地位が教育面でマレー人に与えられている。例を挙げると、教育言語はマレー語を中心とすること、エリート養成のための全寮制中学校への入学はブミプトラの子弟のみであること、各国立大学にはブミプトラに有利な定員枠を設けていること、などである。このようにマレーシアでは学校教育においてもブミプトラ政策が浸透しており、教育制度の前提となっている点が特徴である。

３．現地調査の内容

(1) 初等教育

①Sekolah Sri Bestari（2013年７月29日　現地調査）

Sekolah Sri Bestariは、クアラルンプール日本人学校と年に２回、国際交流会を実施しており、児童・教師とも交流がある私立小学校である。中国系の子女が多いようである。日本人学校と教室は似ているがエアコンは使用せずファンのみであった。電灯もつけていない。１校時目の小学３年英語の授業ではパワーポイントを使用して進めていた。今回視察した授業ではノートとテキストを使っていなかったが、児童は比較的集中していた。授業では、カードやぬいぐるみなど具体物を多く使ったり、２人組のゲームを取り入れたりして英語を体験的に接することができるような授業構成になっていた。２校時目の小学５年社会の授業では、テキストとノートを使いマレーシアの歴史について英語で授業を行っていた。ホワイトボードに図解や出来事をチャートにして説明している点が興味深かった。教師が質問し、児童がおのおの意見を述べそれを採り上げながら解説を加えて授業を進めていた。

②Seri Selangor Primary School（2013年７月31日　現地調査）

Seri Selangor Primary Schoolは公立小学校で、比較的安定した家庭の子女が通う学校である。施設はシンプルでクーラーはなくファンのみであった。マレー系の児童が多く、イスラム教の礼拝室はもちろん、道徳的な掲示物やポスター等が多く見られた。授業は国語であるマレー語で進められていたが、英語もある程度理解しているようであった。３時間目の小学１年算数の授業では、１年生ながら比較的落ち着いて教師の話を聞いていた。教室の机は木製で設備はシンプルであったが、掲示物などしっかりと行っていた。２桁同士の足し算の授業であったが、教師が位取りについて掲示用のシートを活用して丁寧に教えていた。６～７名を指名し、ホワイトボードで問題を解かせ、教師が追加の問題を口頭で述べ指名して答え合わせをしていた。返却されたノートには丸やコメントが書かれていた。机間巡視もまめに行っており丁寧な授業がなされていた。

Seri Selangor Primary Schoolの授業風景

③Sungai penchala Primary School（2015年７月27日　現地調査）

Sungai penchala Primary Schoolは、クアラルンプールの外れにある小さな公立小学校である。この小学校があるKampung Sungai Penchalaは、近年、急速に発達するマレーシアの中でも開発が少ない地域で、周囲のビル群と高

速道路網の間に挟まれた小さなカンポン（村・田舎）である。Kampung Sungai Penchalaに住む住民は、中国系・ヨーロッパ系・日本人はほとんどおらず、マレー系を中心としたマレーシアの伝統的な小村の様相を呈している。よって今回視察したSungai penchala Primary Schoolでは、伝統的なマレーシアのマレー系小学校の様子を視察することができた。1時間目は、体育の授業を視察した。マレー系の児童がほとんどのため、小学生の低学年といえども身体接触のある体育は男女別であった。学校脇の小さな運動スペースで、2人組に分かれてのエクササイズやミニゲームを行っていた。整列なども比較的しっかり行っていた。児童は大変楽しそうに活動を行っていたが、日本と比べるとやや運動量・質ともに少ない印象をもった。2時間目は、図工の授業を視察した。基本的には教科担任制のようで、各教科ごとに教師や教室も変わるようであった。冒頭に教師が授業の内容と概略をホワイトボードに書いて簡単に説明した後、児童は作業を行っていた。その間、教師が机間巡視等を行っていたが、児童は各自作業を淡々とこなしていた。3時間目は英語の授業を視察した。この授業でも授業の冒頭に簡単な復習と例文を提示し、作業の内容の説明を行った後、ワークブックを中心に児童が各自作業を進めていた。その間、教師が丁寧に机間巡視を行い、児童の質問に答えたり、指導を行っている様子が見られた。その後に視察した算数の授業でも同様のスタイルの授業であった。

Sungai penchala Primary Schoolの授業風景

ここまでの現地調査で私立と公立の小学校を視察したが、校舎の規模や設備・人種構成の異なる学校を見学し、マレーシアの小学校の授業の進め方や教室の雰囲気、教師の指導法など体感することができた。概して教師が丁寧に授業を進めているが、日本のような細やかな板書計画や工夫された手立ては少なく、机間巡視と声かけによるオーソドックスな授業が行われていた。児童は比較的落ち着いて授業に取り組んでおり、規律のとれた授業であった。

また、同じ公立学校でも村落部のSungai penchala Primary Schoolでは、今回視察した限りでは、日本のような導入やまとめのしっかりした授業構成があまりなされておらず、ワークシートやワークブックなどの教材を中心に児童が各自作業を進める授業が行われていた。また、教室環境も以前までに視察した私立小学校や都市部の公立小学校とも違い、やや雑然とした教室環境であった。授業も手違いから教科担当の教師が教室に来ないため、急遽授業が変更になる場面もあり、大らかな学級運営がなされているようであった。

(2) 上級中等教育（大学予備教育課程）

①AAJ／日本留学特別コース（2014年7月25日　現地調査）

AAJとはAmbang Asuhan Jepunの略で、マレーシアの最高学府であるマラヤ大学内にある大学予備教育課程の日本留学特別コースのことである。大学予備教育課程とはマレーシアの大学に進学するための準備教育を担当する機関の1つである。AAJは第4代首相マハティール氏が提唱した東方政策の一環として、1982年日本留学のための2年間の特別コースが開設されたのが始まりである。1982年から2010年までの29年間に3,000人を超える留学生（主にマレー系）を日本へ送り出した。2013年は、在籍数1年生74名、2年生83名である。予備教育課は2年間であり、視察した2年生の授業では、日本人教師による日本語の授業と数学や物理などの教科の授業がおこなれていた。日本語の能力はどの生徒も高く、日常会話だけでなく、ホワイトボードに日本語を使って数学や物理の問題を解き、それについて日本語で説明できるレベルであった。教師は、日本語で訂正を行いながら授業を進めていた。ノートも丁寧に漢字を使ってまとめており、意識の高さが伺われる。12月に行われる日本留学試験に合格したのち、日本の主要な国公立大学の理系学部に進学するとのことで、どの生徒も日本に対して関心が高く、丁寧な態度で授業に臨んでいた。ブミプトラ政策のためマレー系がほとんどである

４．おわりに

マレーシアの学校を現地調査して、感じたことは以下の３点である。

１．授業では、概して教師が丁寧に授業を進めているが、日本のような細やかな板書計画や授業展開・工夫された手立ては少なく、ワークブック中心の作業と教師の机間巡視や声かけによる授業が行われていた。児童は比較的落ち着いて授業に取り組んでいた。教師には威厳があるため、規律のとれた授業であった。

２．教室環境では、宗教的な標語やモチベーションを高める箴言などが掲示されていたが、清掃や整理整頓など日本と比較して行き届いていない面が感じられた。マレーシアでは、掃除はメンテナンススタッフが行うので児童は行わない。日本人学校も同様である。そのためか整理整頓などの意識は低いようであった。ICT（情報通信技術）の活用は私立校の方が進んでおり、プロジェクター等を活用した授業が見られた。三者を比較すると、公立学校より私立学校の方が、公立学校の中でも村落部より都市部のほうが、教室整備・環境が整っていると感じた。

３．特にAAJでは、海外留学への意識が大変高かった。AAJに入学する生徒は日本に留学するという明確な目的意識を持っており、２年間で結果を出すために高いモチベーションをもって授業に取り組む様子が見て取れた。視察している私達にも積極的に日本語で話しかけ、日本への意識の高さが感じられた。ブミプトラ政策により、AAJに入学できる生徒はマレー系のみであり、中国系・インド系は入学が難しい。そのため、中国系・インド系の子弟はヨーロッパやオーストラリアへ留学する生徒が多く、海外留学への意識は日本と比較して驚くほど高い。その点は、近年、留学希望者が減少している日本の生徒も見習わなければならないと感じた。

３年間にわたる現地調査により、マレーシア国内の教育現場の様子を肌で感じることができた。そして、今まで自分が行ってきた日本の教育の「利点」を改めて認識したり、また「改善点」も明確になった。また、視察計画の都合で、マレーシアの就学前・中等教育の様子を視察することができなかった。今後の課題としたい。このマレーシアで得た「視点」をさらに突き詰めて、今後の日本での教育活動に生かしていきたいと考える。

＜参考文献＞

本報告を作成するにあたり、いちいち引用を示さないが以下の文献を参考にし、多くの知見を得た。文末にあたり、感謝申し上げる。

・鐘ヶ江 弓子、「マレーシアの教育政策と学校教育制度Educational Policies and Education System in Malaysia」、共栄大学研究論集 創刊号 2002
・外務省ホームページ、キッズ外務省、世界の学校を見てみよう！マレーシア（Malaysia）入手先（http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/malaysia.html）
・マレーシア観光局政府ホームページ、入手先（http://www.tourismmalaysia.or.jp/kihon/kihon_b.htm）
・資料集MALAYSIA 編集委員会、「資料集　MALAYSIA　2015」、クアラルンプール日本人学校、2015